

03-25

細菌性髄膜炎および感染性心内膜炎の治療中に血球貪食症候群を発症した一例

熊本赤十字病院 内科¹⁾、熊本赤十字病院 神経内科²⁾

○澤村 陽子¹⁾、稲富 享子¹⁾、甲斐 健一¹⁾、宮部 陽永¹⁾、帖佐 俊行¹⁾、加島 雅之¹⁾、上木原宗一¹⁾、寺崎 修司²⁾

症例は23歳女性、4日前からの発熱・頭痛・嘔吐・意識障害を主訴に救急外来受診した。髄液細胞数1400/3と上昇しており細菌性髄膜炎の診断にて同日緊急入院となり、CTX+VCMの投与を開始した。経胸壁心エコーにて僧帽弁に疣贅の付着を認め、血液培養でMSSAが陽性であり感染性心内膜炎と診断した。尚、髄液培養からもMSSAが検出された。培養結果をもとに入院4日目よりABPC/MCIPC+GMに変更した。その後経過は良好で、血液培養陰性確認から6週間の抗菌薬治療を継続する方針とした。しかし治療終了予定7日前の入院39日目、急激な貧血の進行を認め、また入院42日目より40℃台の発熱を認めた。薬剤熱を考え抗菌薬を中止するも症状が持続、さらに白血球・血小板の減少も認めたため骨髓穿刺を施行したところ、組織球の増加と血球貪食像を認めた。血清フェリチン高値・脾腫も認め、血球貪食症候群(HPS)と診断し、ステロイド内服開始したところ、解熱・血球減少改善を認めた。成人に発症するHPSは二次性である場合が多く、感染症・悪性腫瘍・自己免疫性疾患・薬剤・造血幹細胞移植などに関連して発症するといわれているが、本症例は感染性心内膜炎、髄膜炎は改善傾向であり、血液検査・身体所見からその他の感染症も多量的であった。悪性疾患や自己免疫疾患も否定的であり、長期間多量の抗菌薬使用があったことより薬剤性HPSが最も疑われた。HPSは症状が急速に進行して致死的な経過をたどる重症例も存在するため、早期の診断・治療が必要である。持続する高熱に血球減少を伴う症例ではHPSの可能性も念頭に鑑別する必要があると考えられた。今回感染症の治療中に発症したHPSの一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

05-19

若年成人女性の貧血の検討:女子大学生の縦断的調査から

日本赤十字広島看護大学 専門基礎¹⁾、広島赤十字原爆病院 総合内科²⁾

○宇野 久光^{1,2)}

【緒言】日本人若年女性の貧血頻度の増加が近年報告されており、特に若年女性の貧血頻度の増加が問題となっている。貧血の有病率は、対象集団により異なるため、比較的生活背景と年齢が均一な集団である女子大学生の縦断的調査を行い、全国調査のそれと比較したので報告する。

【方法】広島県H大学で2005年から2011年に康診断を受けた女子大学生3,910人を対象とした。また全国調査資料として、1999年～2011年の平成国民健康栄養調査の20歳代の若年成人女性及び日本赤十字社血液事業本部の血液事業の現状統計表を用いた。

【結果】調査期間では、女子学生の入学前後でHb値の変化に一定の傾向は認められなかった。2008年健診年ごろから女子学生全体の平均Hb値減少および有病率増加の傾向が認められた。平均MCV値は女子大学生、全国調査の若年成人女性ともに調査期間に亘って減少し続けていた。全国調査の若年成人女性では、若年女性の鉄摂取量が減少してきており、鉄摂取量が必要摂取量を下回っていた。献血事業では20歳代の献血者数の従来の減少に加えて、全献血希望者に占める貧血者の割合に減少傾向が見られたが、全献血者に占める学生献血希望者の割合は近年減少傾向を示していた。

【考察】特定集団の縦断研究から、若年成人女性の貧血傾向が認められ、その原因として鉄欠乏性貧血が考えられた。これらには近年の食生活習慣などの関与が示唆され、これらは、若年女性でやせの増加と関係があるのかも知れない。若年女性の献血離れを防ぐためにも女子学生などを対象とした、食生活の啓蒙活動の必要性が改めて示された。

03-26

化学療法を受けた患者の手指衛生行動確立への関わり

福井赤十字病院 内科

○炭田真由美

【はじめに】化学療法を受ける患者の感染予防は、看護の重要な役割の一つであり、日常生活の中で患者が行うセルフケア行動もこの観点から指導していく必要がある。今回、感染予防の行動の中の手指衛生に焦点を当てて関わった一事例の経過から、より有効な指導方法を考察する。本研究は院内倫理委員会の承認を得て実施した。【事例紹介】A氏70歳代女性。数年前に乳がんがんで化学療法を受けた経験あり。急性白血病で化学療法中。

【経過と看護の実際】1.A氏の手洗いへの認識と行動:「乳がんの時には家で普通に過ごしてた」「目に見える汚れが取れば大丈夫」と述べているが、手を洗うべき時に手洗いはできていない。床に落ちた物を拾うことには無頓着。2.看護介入:手指衛生についてA氏が実施できている点を伝えた上で手指衛生の必要性、床に落ちた物や触れた手が菌で汚染されることを説明した。ブラックライトを使用してA氏が行っていた手洗いは洗い残しがあることを見てもらった。3.介入後:手指衛生の必要性や床など環境からの手指汚染の危険性は理解された。また、ブラックライトで洗い残しを見て「自分のいつもの手洗いは全然だめだね」と述べ、「1週間後にもう一度(ブラックライトで)見たい」と希望され、実施した。洗う時の手技にも変化が見られ、泡立てて指の間も洗うようになった。

【考察】A氏はかつての経験もあり、化学療法による易感染状態についての認識が薄かったため、まずできている点は認めた上で根拠に基づいた手指衛生の必要性を説明したことで理解を深めることができた。ブラックライトによって、今までの自分の手洗いの結果を客観的に見ることができ、強い印象を与えた。さらに1週間後に再度手技確認を行うことによって、不十分な点を再認識でき、確実な手技の習得ができたと考えられる。

05-20

血液センター看護師としての学会認定・アフエレーシスナース制度との係わり

中四国ブロック血液センター 技術管理課

○岡村 弘子

1. はじめに2010年、アフエレーシスに精通し安全なアフエレーシスに寄与することができる看護師の育成を目的として、日本・輸血細胞治療学会により「学会認定・アフエレーシスナース制度」が立ち上げられた。2011年に、学会認定・アフエレーシスナース試験を受験し認定を取得したので、血液センター看護師としての認定制度との係わりについて報告する。2. 血液センターでのアフエレーシスについて 血液センターのアフエレーシスは血漿と血小板の採取が主体であり、成分採血装置の準備や献血者への穿刺、採取中の観察等の工程を看護師が実施している。全ての作業は標準作業手順書に基づき実施し、献血者の安全確保と血液の品質の確保に努めている。3. 認定取得の意義について 2009年以降、輸血業務に関連した学会認定による看護師制度が開始した。輸血に関する看護師への教育の重要性が認識され、輸血療法への積極的な参加が望まれている。全国の医療機関で使用される血漿と血小板の採取を専門的に行っている血液センターにおいても、看護師がより専門的な知識や技術を習得することは必要不可欠である。認定は5年毎の更新制であり、輸血関連学会への参加や学会発表等の業績を積み重ねることが求められる。継続的に自己研鑽に励む機会が与えられることにより人材育成につながり、看護の質向上が図られることが期待される。また、専門職としての認知が得られ、将来的に幅広く医療を担う機会と自覚を得ることにもなる。4. まとめ血液センターにおける看護の質向上を目的として、学会認定・アフエレーシスナース制度の広報と受験推進活動を実施していきたい。また、認定取得者が採血副作用の分析と防止等、血液センターのアフエレーシスにおいて中心的役割を果たせるような活動計画を立て実施していくよう努めたい。